J. Jpn. Soc. Soil Phys.
土壌の物理性
No. 98, p. 44（2004）

「健康な土」「病んだ土」

岩田　進午　著
新日本出版社　2004 年 6 月発行
B6 版　181 ページ　1,785 円

著者の岩田進午さんは，土壌水の熱力学に関して土壌物理の理論研究を引っ張り，田渕さんと共に Soil-water Interactions（1988）という教科書をはじめて外国の出版社から出した学者というイメージをもたれている方も多いと思う。しかし，1985 年に出版した一般の読者向けの「土の話」では土の不思議を解説し，1989 年には NHK 教育テレビで「土を科学する」という市民大学講座を 12 回にわたって担当した。このころから，土についての科学的な説明に加えて，「農業と土」のかかわりについて土の健全性と言う視点からの考察が見られる。その後，「土のはたらき」（1991），「土は生命の源」（1995），「生ごみ堆肥リサイクル」（2001，共著）においてもこの点が強調され，今回の著書にも引き継がれている。本書の書き出しが「2 歳の孫娘が，今日も，庭の土をシャベルで楽しそうに掘り返しています」という一文からは理論家ではなく啓蒙家としての岩田さんを感じる。

本書で筆者が主張していることを 2 つ紹介する。一つは，今までの著書にも見られたことであるが，現在の我が国農業においては，伝統的な農業に見られる炭素の循環が破綻していることを指摘している。これは，昔から水田農業に重点が置かれていたことから「日本の農業技術の伝統が，土を単なる養分の器とみなし，農業イコール養分供給という考えに偏りがちであった」こと，および「そして現在，金銭の収支のみが問題にされるようになった。今の利益，利便性のみを追求するようになり，土の肥沃性，環境への負荷，人間の健康，化石エネルギの使用量などへの影響が全く無視されている」ことが決定的であると指摘している。

もう一つは，著者が今までに書かれた本では断片的にしか触れられていなかったことである。生態学では“多様性指数”を用いてその植生の生産性，安定性を推定していることから，土の肥沃性の鍵は何かを考えており，著者は土の物理的，化学的そして生物的なバラツキにあるのではないかと推定している。そして「研究者・技術者だけでなく，農家の方々，家庭菜園にいそしんでいる方々，みんなで，この課題に向けて，いろいろな試みをやっていただくことが私の切なる願いです」と夢の実現に向けたメッセージで締めくくっている。土の物理性のバラツキは常々我々を悩ましてきた問題であり，統計処理で済ますことでは何の解決にもならないと疑問を持たれている人も少なくないと思う。著者はこのバラツキに一つの機能を与えており，評価法について少しヒントを出している。バラツキについてさらに興味のある方は，日本農業研究所報告を読むと良い。

本書は 6 章からなっており，いくつかの章は科学的に冷静に書かれており，残りの章は，人間の愚かさを指摘し，より高い次元で自然との共生理念を身につけていくため，一緒に考え行動しましょうと情熱を持って呼びかけている。

長谷川周一（北海道大学大学院農学研究科）

受稿年月日：2004 年 9 月 11 日
受理年月日：2004 年 9 月 11 日